

まえがき

本書は、フランス外交やフランスと世界をめぐる事情に関心をもつ大学生を対象にして編纂された教科書です。

わが国では多くの分野で海外の研究といえば英語からの研究業績が主流であるため、各国の外交や対外政策研究はともすれば米英の見方からのものが多くなります。筆者の経験でいえば、そうした英語の研究は初学者が大まかな知識の概要を得るには有効であることは確かだと思います。国際比較に基づいてできるだけ客観的な視点から書かれているものも多いように思うからです。

しかしそうした姿勢だけですと、米英のスタンダードを絶対視したものの見方になります。そうした潮流に異を唱えているのが、アジアでは中国ですし、ヨーロッパではフランスです。したがって本書は基本的にフランス語の文献をもとにフランス研究を専門とする研究者の中から、それぞれの分野でわが国ではもっとも評価の高い研究者に執筆をお願いし、初学者からある程度の専門知識を有する読者にも、十分な知見が得られることを目指して編集したものです。

本書の総論では、最初に19世紀後半の第三共和制から現代までのフランス外交の歴史を概観しました。フランス外交の通史を書いた邦語の書籍は極めて希少なので、導入部分で概略を把握してほしいと考えたからです。できるだけ世界全体の動きにも配慮しながら、フランス外交の理解に不可欠と思われる政策の変遷や事象をまとめてみたつもりです。しかし150年近くの歴史を60頁ほどで論じたわけですから、抜け落ちている部分はあると思います。要は大きな流れとその中での事件や重要人物の名前などを記憶に残していただければと思って紹介しました。

第I部では、それぞれのイシューの執筆者は日本でそのテーマの研究を代表する研究者です。フランスにとって重要な地域であるドイツ、ヨーロッパ、中東・アフリカ・アジアにおける旧植民地諸国との関係の歴史と問題点について分かりやすく説明をしたつもりです。欧州統合と、その中での独仏の重要性は

夙にいわれるところですが、その重要性の内実について本書の読者は納得いく理解を得られることと確信します。また第二次世界大戦後頻発する世界の紛争勃発地域にフランスが歴史的にどのようにかかわっていたのか。そうした問いにも的確な回答を読者にお伝えする試みでもあります。

なお、当初米仏関係について1章を設定する予定でしたが、それは総論の方に組み込むことにいたしました。世界のほとんどの国の戦後外交を論じるときにアメリカとの関係を論じることは不可欠です。フランス外交においてもそれは例外ではなく、戦後フランス外交の大きな軸となっているのが対米外交であることは明らかだからです。

第Ⅱ部ではトピック別にフランスのスタンスについて論じてみました。政治・経済政策や防衛政策にはフランス特有の考え方が顕著に表れていますが、科学・原子力・文化外交などにはフランスの独自性をうかがい知ることができます。そこで扱ったいずれのテーマも外交政策に直接・間接的に関連をもっています。さらに移民大国、農業大国としてのフランス、地方自治体の取り組みなどにもフランス社会の独特の側面がみられます。

2019年7月

執筆者を代表して

渡邊 啓貴